

## 再会の住吉

——「濡標」巻の住吉参詣における明石の君をめぐって——

竹 内 正 彦

### 一、「濡標」巻における明石の君の住吉参詣

「濡標」巻の秋。明石の君は久方ぶりに住吉にむかう。幼少の頃から毎年春秋ごとの住吉参詣を恒例としていた明石の君であったが、昨年从今年にかけての懐妊と出産とによってかなわず、そのお詫びをかねて出むいたのであった。ところが、参詣の舟を岸に近づけた明石の君一行は、渚に満ちあふれる賑わいに驚嘆することとなる。目を見張る奉納品が次々と運ばれ、衆人たちの装束や容貌なども厳選されている。「誰が詣でたまへるぞ」との明石の君の従者などの問いかけに、「内大臣殿の御願はたしに詣でたまふを知らぬ人もありけり」と、「はかなきほどの下衆」さえもが「心地よげにうち笑ふ」のであった（「濡標」②三〇二頁）。ふと聞こえてきたその下衆のことは明石の君の胸は強く締め付けられる。「内大臣殿」とは、あの明石の地で別離して以来、逢うことのなかった光源氏その人のことなのであった。確かに、明石での別離以後も光源氏からは明石姫君誕生の際に乳母が派遣され、五十日の祝いにも使いが送られてきており、「かく思し出づばかりのなごりとどめたる身」を「いとたけくやうやう思」うようになつていた明石の君であった（同・二九五頁）。本来喜ぶべきこの邂逅は、しかし、そのような明石の君に自らの「身のほど」をあらためて強く意識させるのであった。

げに、あさましよう、月日もこそあれ、なかなか、この御ありさまをはるかに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ、さすがにかけ離れたまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だに、もの思ひなげにて仕うまつるを色節に思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけておぼつかなく思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らず立ち出でつらむ、など思ひつづくるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。

（「濡標」②三〇二〜三〇三頁）

「はかなきほどの下衆」のことは、明石の君は「げに、あさましよう」と反芻しながら、他の月日ではなく、どうしてこの日この場所で会ってしまったのかと思ひ、会うことによつてかえつて光源氏の威勢を遙かに見やることになつた自らの「身のほど」を「口惜しくう」思わずにはいられない。そして、姫君を儲けたことを「さすがにかけ離れたまつらぬ宿世」とはしつづも、「かく口惜しき際の者」でさえ「もの思ひなげにて」仕えている姿に比しながら、光源氏のことを「心にかけておぼつかなく」思う自分がこれほどまでに知れわたっていた参詣のことを知らないでここに來てしまったことを「何の罪深き身にて」と自問し、人知れず涙を流すのであった。

松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆる袍衣の濃き薄き数知らず——。明石の君は、その視線を光源氏一行に向ける。玉上琢弥はこのあたりの叙述をさして「明石の人々の目を仮りて、源氏の行列を描く」と指摘するが、明石の君に寄り添った視線をもって「花

紅葉をこき散らしたると見ゆる」光源氏一行の細部が語られていく。蔵人となって「青色しるく見え」る衣をまとった右近将監。衛門佐となり「もの思ひなき気色」で「おどろおどろしき赤衣姿」の良清。明石の地で見えた人々が何の憂いもない様子でその一行に加わっている。

なかでも、葵の上の遺児である夕霧を「限りなくかしづき立て」ている様子に「数ならぬさまにてもものしたまふ」姫君の姿を想起する明石の君は、住吉の御社の方をいよいよ拝むのであったが、光源氏一行の威勢を前にして「数ならぬ身」が少しばかりの供物を奉じても「神も見入れ数まへたまふべきにもあらず」、かといって明石に帰るのも「中空」であった。明石の君を乗せた舟は「祓をだにせむ」と難波にむけて静かにその場を漕ぎ離れていくのであった(同・三〇三〜三〇四頁)。

「濡標」巻における光源氏による住吉参詣については、三谷邦明によって八十嶋祭との関連が論じられ、石原昭平によってその禊祓儀礼との関わりが着目され、また、この場における明石の君については、竹田誠子によって八十嶋祭にかかわる「乳母の始原的役割」や「遊女性」が指摘されているが、住吉参詣における明石の君と光源氏との邂逅は、明石の君に光源氏との決定的な身分的格差をつきつける場ともなっている。光源氏の威勢におされてその場を立ち去った明石の君のことを惟光から聞いた光源氏は、この偶然を「神の御しるべ」と思い、また、「なかなか思ふらむかし」と明石の君の心情を案じて、「みをつくし恋ふるしるしにこまでもめぐり逢ひけむえには深しな」とここでふたりが「めぐり逢ひけむ」宿縁の深さを歌うが、そこでも明石の君は「数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ」と「数なら」ぬわが身を歌い返すのであった(同・三〇六〜三〇七頁)。

斎藤暁子は「源氏が本来所屬している見事な世界を目のあたりに見たことは、彼女を圧倒し、彼女のたけき思いを破ってしまった。松風巻に再び姿を現わした二年後の彼女は、姫を擁した己れの位置づけを決してあやまつまいとし、幻想の胚胎を固く己れに禁じている人であ

る」と述べ、篠原昭二は「光源氏の運命と住吉明神に導かれる明石の宿世はここに合致し、二人の栄華の達成とともに物語は収束する勢いにある」としながら「光源氏と明石の女の「身の程」に基づく食い違いを基底にして、それにこだわる女のありようが浮き彫りにされているというのが普通の読み方である」とし、「光源氏の運命物語と明石の霊験譚との二つの主題の流れにそのまま従うことに、語り手自身が抵抗していることになる。ここに、物語の結末としての光源氏の栄華を語ろうとする語り手と、それを物語の流れのままには語りえないという現実認識を持つ語り手という、語り手の内部における矛盾が生じていることになる」と述べて「女の立場に拘泥せざるをえなかった」語り手によって生成されていく物語のあり方を指摘している。

「濡標」巻の住吉参詣における明石の君の内面世界は、以後の明石の君のあり方を規定していくばかりか、物語が新たな展開を遂げていくその契機となっているといつてよからうが、ここではその邂逅が「再会」といってよいものであったことに注意したい。明石の地で別れた光源氏と明石の君は、この住吉において光源氏とふたび邂逅する。もちろん、ここでふたりは両者の存在を認識して歌をかわしているものの直接対面することはない。そうした意味においてはすれ違いともいえるわけだが、むしろ、そうしたかたちでふたりの再会が語られることの意義が問われてもよいであろう。

住吉におけるこの邂逅を、「再会」という視座から見つめ直すことによって、そこにはいかなる物語が顕れ現れてくるのであろうか。まずは、再会の物語の系譜を追うところからはじめてみることにしたい。

## 二、住吉参詣と再会譚

住吉における明石の君と光源氏との再会は、ひとたび別れた男女がふたたび邂逅するという展開をふむものであり、いわゆる再会譚という話型によってとらえることができる。相原宏美は「何らかの理由で

別れを余儀なくされた登場人物たちが、時を経て邂逅する、こうしたモチーフを広義に「再会譚」と称する」とし、その原型をイザナキ・イザナミ神話の黄泉の国における再会に求めつつ、源氏物語におけるその例として、逢坂の関での空蟬と光源氏の再会（「関屋」）、樺市での玉鬘と右近の再会（「玉鬘」）、そして住吉参詣での明石の君と光源氏のすれ違い（「澤標」）などをあげながら「男の側から見ると、「異郷」を経験しその力を内在する女と獲得することで、さらなる栄華へと進む新たな出発点であり、女にとっては最終的にそこに落ち着くかどうかは別として、さすらいに一区切りつけ、今後の居場所を見つげるための契機ととらえることができよう」と指摘する。空蟬は逢坂の関における光源氏との再会后、最終的には二条東院に迎えとられ、明石の君や玉鬘もついに六条院に入っており、こうした事例から考えれば、それらの再会は確かに「さすらいに一区切りつけ、今後の居場所を見つげるための契機」になつていようにも見える。しかしながら、たとえば、明石の君は、住吉参詣の後、明石から大堰へと移住したうえで六条院へと入つていくのであり、その転居のあり方からすれば、住吉における再会は、むしろ彼女の「さすらい」を呼び起こすものとなつているとはいえまいか。いま、夕顔の乳母の娘であつた右近と再会する玉鬘の事例を除き、男女が再会するという事例に絞つてみると、そこにはめぐり逢つたことに対する悲痛なうめき声が響いてくるようだ。奇しき縁による再会がその根幹にあることは動かないものの、男女の再会譚において際だつのはふたりの間に生じてしまつたいかんともしがたい懸隔であり、そこにおいてふたりは、ふたたびめぐり逢うことによつて昔日とは異なるふたりの間柄を知るのであつた。

伊勢物語六〇段は、そうした悲哀に満ちた男女の再会を語る。

むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいきけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらず

は飲まじ」といひければ、かはらけとりていだしたりけるに、さかななりける橘をとりて、

さつき待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ思ひ出でて、尼になりて山に入りてぞありける。

（新編日本古典文学全集・一六二〜一六三頁）

男は宮仕えにかまけて女に愛情を充分に示すことができず、女は「まめに思はむ」という別の男について他国に去つてしまつたが、宇佐の使としてその国を訪れた折、男は「祇承の官人の妻」となつていた女と再会することとなる。当初、女は男に気づかないでいたが、男が歌つた「さつき待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」という歌によつて、目の前の男がかつての夫であることを思い出し、尼になつて山に入つてしまふ。

宇佐の使とそれを饗応する祇承の官人の妻。このふたりはすでに昔日のふたりではない。女にとつての男との再会はその男との懸隔を突きつけるものであつた。「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」という男のことは確かに女に対して過酷なものであるようだが、片桐洋一は「一夫多妻制の時代において、特にこれだけの身分格差がある場合には、むしろ、これだけいつまでも覚えていく男主人の優しさを読みとるべきかもしれない。その優しさがかえつてつらく、女はみずから恥じて尼になつたのであろう」と指摘する。「さつき待つ」の歌は、かつて「心もまめならざりける」男が女を忘れてはいなかったことを、「まめ」を求めて男から去つた女につきつけるものなのであり、とりもどすことのできない過去をまえにして女は遁世するのであつた。また、伊勢物語六二段でも、男が「年ごろ訪れざりける」ことによつて、女が「はかなき人の言につきて」男から去り、「人の国なりける人につかはれて」いる時に男と再会する話が語られていゝ。ここでは男が「いにしへのにほひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな」と歌い、返事もできない女にさらに「これやこのわれにあふみをのがれつつ年月経れどまさりがほなき」と歌つて衣服を与

えるが、女はそれを捨てて逃げ去り、「いづちいぬらむともしらず」とされる(同・一六三〜一六四頁)。男のもとを去って零落した女は、その姿を再会した男のまえにさらしていることが耐えられなかったのであろう。ふたりの再会は、同時にふたりの永遠の別れへと連接していくのであった。

大和物語一四八段の蘆刈の話は、これらとは逆に、「やむごとなき所」の北の方となったかつての妻と、蘆を背負って「かたるのやうなる姿」となっていた男との再会を語るものである。もともとこのふたりは深く愛し合っており、貧しい暮らしぶりのなかで別れざるをえなかったのであるが、ふたりの再会が照らし出すものは、やはり、現在のふたりのいかんともしがたい懸隔である。「やむごとなき所」の北の方となったかつての妻を見た男が、「わがさまのいといらなくなりたる」を思つて逃げ去り、「君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞすみ憂き」との歌をおくつたのに対して、かつての妻は「悲しきことものにも似ず、よよとぞ泣きける」のであった(同・三七四〜三八〇頁)。その後のふたりの消息はさだかではないが、かつてと同じふたりをそこに見ることはできなからう。

こうした再会譚をめぐって、折口信夫は「分れた男と女が再び邂逅するといった形の話があつて、さうした歌と共に、すぐ聯想された」とし、その始原に「阪むかへ」という習慣を指摘して、「阪に迎へないと、峠の逆髪の神に邪魔されて帰れないといふ信仰」があり、「その迎へにゆくものは女であり(昔の、巫子が神を迎へに行くという信仰から)、迎へられるものは男であると考へられ」、「そこで、この行き逢ひの形の伝説が出来て来る」と述べる。<sup>13)</sup>高崎正秀はその見解をうけながら「坂迎へは、坂に迎へに行かぬと、坂神に邪魔されて無事に戻れないことを恐れたので、本来は巫女としての女性が坂神を祀り之をなだめあやしたのが、大きく国家的な儀礼にまで発展すれば、即位の固関使の様な形にもなり、女性が男を迎へに行くべき形であつたものが、遂に男から女を迎へた形——迎へたのではなく偶然邂逅した姿で、源

語では「関屋」の巻に結構され、後の謡曲では蟬丸に対する逆髪宮の様なえたいの知れぬ構想に展開して行く」として、源氏物語「関屋」巻における光源氏と空蟬の再会等を位置づけている。<sup>14)</sup>再会譚の始原に「坂迎へ」という習俗を考えることは、再会する場の問題を考えるうえで、示唆に富むものであろう。ただし、ここでは偶然に再会を果たした男女がそこで別れなければならぬことに目をとどめたい。しかも、その別れはあたかも異郷のものとの別れに似て永遠の別れとなるべきものであった。再会とは、昔日をともにしたもののたちの再会であると同時に、まったく知らぬ世界を背負つたものたちの邂逅なのであり、そこにこそふたたび出会ってしまったものたちの苦衷がある。逢坂の関において光源氏と再会した空蟬は「行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ」と歌うがそれも「かひなし」と語られる「関屋」②(三六一頁)。そして、その後も光源氏との歌の贈答はあるものの、夫と死別し、河内守の懸想を避けた空蟬は、出家することとなる。ふたりは逢坂の関において再会した。しかし、「いま内大臣として時めく源氏の人生と一介の受領の妻との関係は、これ以上発展のしようもない」<sup>15)</sup>ものとしてあるのであった。

三谷邦明が「明石上は明石入道も含めて、源氏物語の筋書の中では住吉信仰という古代的精神の流れの中で描かれている人物であると一般に言われている。それ故、彼女が住吉神社に詣る時に、不幸な出会いを与えることは、筋書上の明石上の人間像としては若干矛盾しているといえる」と指摘するように、「漂標」巻における明石の君と光源氏との再会は、住吉神の靈験による再会とは見えないところに特徴があり、いわゆる靈験譚としてではなく、やはり、これまでおさえてきたような男女の再会譚の系譜に連なるものとしてとらえうる。男女の再会譚において、ふたたび出会った男女は、もう二度と手を取りあうことはない。明石の君もまた、このまま光源氏の手のとどかないところへ去ってしまうのではないか。明石の君は、そのような予感を身にまといながらこの住吉にたたずんでいるのであった。

しかしながら、明石の君は、この後も物語に登場し続け、大堰山荘に移住後、ついには六条院へと迎えとられる。住吉における再会の場におけるその予感を打ち消していくものとは何か。いま少し考えてみたい。

### 三、遮断される視線

ふたたびめぐり逢った男女は、その再会によって永遠に別れていくこととなる。しかし、その別れは一方的な別れであった。乗岡憲正は、再会譚において男女が再会する折、どちらか一方が気付いているのに一方は気付いていないというあり方に着目して「気が付いていない方は総じて零落している側、つまり女の方である」と指摘し、再会譚を「男は気がついて居るが、零落する女は全然気がつかぬ、歌又は詞のかけあいあって後、始めて気がつき逃走して身を隠す、をこな、余りにをこな女の哀話」と把握してそれを「敗北逃走譚」ととらえた。また、そうした再会譚の始原について、乗岡は次のようにも述べている。

「相手の女（男）は気がついていないが、男（女）には判っている」という再会文学に屢々用いられる契機、それも零落している側が、相手に気付かず「垣間見」乃至は「言問い」という契機を回転軸として正体が身頭わされ、後、蒼惶として逃走する趣向は、創作以前とも云うべき、神との一問一答によって屈服した精霊が、服従を誓うか、正体暴露（所顕し）から逃走して自ら隠り、身する所謂神と精霊との「霊争い」の相に於いてこれを理會し得るのではないかと思う。

再会の後に女性が姿を隠すという物語展開の始原には、神との一問一答に敗れた精霊が服従を誓うか正体を明かして逃走する「霊争い」があるという。この見解によれば、男女の再会譚において、とくに零落した女性が男性のもとから逃げ去っていくという展開をとげるためには、男性の「垣間見」や「言問い」によってはじめて女性が男性に気

づくといった要素が必要なのであった。ただし、高崎正秀が「隙見をするといふことは、相手の神秘性を発くことであつた」とし、「白鳥姫説話の（水の女）は羽衣を脱いだ裸形を見られると、如何に相手は下賤でも、男に身を委ねねばならぬと語られてゐる」と述べているように、女性が垣間見されるといふことは神秘性を暴かれることであり、そのために女性は垣間見した男性と結婚せねばならなかつた。一方では垣間見が逃走へとつながり、一方ではそれが結婚へと展開する。こうしたあり方について、林田孝和は「その客体の変容に起因する」と分析する。すなわち、記紀神話においてイザナキが覗いたイザナミには雷神がたかつており、山幸が垣間見た豊玉姫は鰐の姿であつたように、「見られる対象が人間以外の場合——客体が異類であるとき、垣間見た者との訣別が決定づけられている」とし、「対象が神話的、民話的なメルヘンの世界のものから、生身の人間へと変容したとき、覗き見が結婚の契機として語られる垣間見の文芸が発生したのである」と説くのである。再会譚の場合、そこに語られる男女は、もちろん異類ではない。しかし、時を隔てて変わり果てた姿をさらすものたちは、すでに昔日のものたちではなく、そうした意味において、異郷に生きるものたちと同じ様相を呈しているとしてもよからう。ふたたびのめぐり逢いは、男女のいかんともしがたい懸隔を際立たせる。その邂逅が再会であることによってふたりは訣別しなくてはならないのである。

住吉における明石の君と光源氏との再会の場合、いくつかの点においてこれまで見てきた再会譚とは異なる要素が認められる。身分格差が女性である明石の君の零落によるものではなく、都に帰還した光源氏の威勢が増したことによるものであること、ふたりの再会において相手に気づいていないのは威勢のある側の光源氏であり、その光源氏を見ようとしているのは明石の君であること、そして、ついに明石の君は光源氏の姿を見ないことなどである。これらのうち、明石の君が以前と変わっていないなくても光源氏の威勢は明石の地にいたころとは比べようもないし、男女の立場の逆転は「蘆刈」にも見られた。ま

た、異類とはこの世とは異なる世界に住するものたちの謂いであり、明石の君の目に想像しえないような抜きん出た光源氏の姿が映ったとすれば再会譚の枠組みから逸脱するものとはいえない。すなわち、女性が零落していないことや男女の立場の逆転などは、再会することによって明確となる両者の立場のどうしようもない懸隔を重視するならば、相対的な問題として考えることができよう。ただし、明石の君が十分に光源氏の姿を見いだすことができなかったことは、これまで見てきた再会譚のあり方からすれば、看過できない要素であるようだ。

御車をはるかに見やれば、なかなか心やましくて、恋しき御影をもえ見たてまつらず。河原の大臣の御例をまねびて、童隨身を賜りたまひける、いとをかしげに装束き、角髪結ひて、紫裾濃の元結なまめかしう、丈姿ととのひうつくしげにて十人、さまことにいまめかしう見ゆ。大殿腹の若君、限りなくかしづき立てて、馬副、童のほどみなつくりあはせて、様変へて装束きわけたり。雲居はるかにめでたく見ゆるにつけても、若君の数ならぬさまにてものしたまふをいみじと思ふ。いよいよ御社の方を拝みきこゆ。

〔濡標〕②三〇四頁

光源氏一行の華やかな様子に目をとどめてきた明石の君は、その一行の中心である光源氏の「御車」を眺望する。しかしながら、ここで明石の君は「なかなか心やましくて」、光源氏の「恋しき御影」を見ることができない。明石の君の視線は、光源氏その人をとらえることなく、その周囲にずらされ、「河原の大臣の御例をまねびて」賜った童隨身から「限りなくかしづき立て」られた「大殿腹の若君」にとどまる。そして、「雲居はるかにめでたく」見えるその様子に、「数ならぬさまにてものをしたまふ」わが娘を引き比べずにはいられない明石の君は、「いよいよ御社の方を拝みきこ」えるのであった。

「濡標」巻の住吉参詣における明石の君の「一人称的言説」を分析した三谷邦明は、それが「明石君の住吉参詣日記」ともいえるものであることを指摘しながら、ここで「明石君の視点と光源氏の視座は出

会うことなく、すれ違い、離別する」ことに着目して、両者が「ここで会見することは、明石姫君の鄙誕生を確認することにな」つてしまひ、「明石君と姫君には、大堰山荘のような、いくつかの通過儀礼が必要なのであり、その階梯を踏むことで、一族は栄華を獲得することができるのである」と述べるが、明石の君が光源氏の姿を目のあたりした時には、明石の君を逃走せしめるまでの光源氏の神聖が顕現することになったのであろう。少なくとも再会譚の話し型からすれば、そのような物語展開が予感される。しかし、明石の君は「心やまし」との思ひによって光源氏の姿を見ることができなかった。そして、見ないことによつて明石の君はその場にとどまり、「いよいよ御社の方を拝みきこ」え、住吉の神に対して強く祈念することとなる。姫君にかかわることとはいえ、ふたりの結びつきを願うこの祈念は、むしろ再会譚において遁世していった女性たちとは逆のふるまいといつてよい。住吉におけるふたりの再会は男女の再会譚の系譜からみると特異な展開を上げていくのであった。

明石の君は光源氏の姿を見ることができなかった。それは、しかし、御簾などによって隔てられていたためではない。なかなか心やましくて、恋しき御影をもえ見たてまつらず——。物語はその理由をあくまでも明石の君の心のありように求めている。明石の君は抱いた「心やまし」という心性はいかなるものか。そして、それはいかなる物語世界を構成していくのであろうか。

#### 四、「心やまし」き明石の君

明石の君が抱く「心やまし」とはいかなる心性なのか。こころみに辞典類を紐解くと、たとえば『日本国語大辞典』（小学館）は「相手がこちらの思うようにならない時にいだけ、不満、怒り、あせり、もどかしさなどの気持ちを用いる。不愉快である。むっとする。憤懣をおぼえる。気がもめる。心がいらいらする。ねたましい」とし、『角川古語

大辞典(角川書店)は「不快でいらいらするさま。思いどおりにならず不満であるさま」としているが、『岩波古語辞典』(岩波書店)は「自分より優越している」と認めた相手に対して感じる劣等意識や、敗北感をこらえている不愉快な感情を表す。類義語ネタシは、自分の方が優越な人間だと思ふのに、相手が結構いろいろなことをして、自分の思うままには行かないのを、小癪なと思ふ感情をいう」とおさえたうえで、「(自分の力でどうともできない相手に、強い態度や行動をとられて、何ともしようがなく)つらくて、いやに思う」「(劣等感・敗北感で)いらいらする」「(相手が巧みで)自分自身が感じ入る」という意味をあげている。「心やまし」は動詞「心やむ」に対応する形容詞と考えてよさそうであるが、源氏物語における「心やまし」を検討した望月郁子は「源氏物語におけるココロヤマシは日常さらに体験される心情ではなく、現代語のへおもしろくない・不満だ・…よりもずっと深く重い心の痛みであり、一旦ココロヤマシと意識されると、容易にはもとに戻れない質のものであつて、自己の敗北を明確なものとして認識せざるをえない時の心情をいうのではないかと思われる」と述べ、『岩波古語辞典』等の見解を認めながら「ココロヤマシの重さを考えると、単に語義の問題にとどまらず、物語展開上のキイワードの役割を果たす場合もありそうである」と指摘する。明石の君の場合、「心やまし」という心性は光源氏の姿を見ることができないという所作の起因を形成することによって再会譚の話型から明石の君を逸脱させていくものであり、確かに「物語展開上のキイワードの役割」を果たしているといえよう。望月は「心やまし」を「容易にはもとに戻れない」「深く重い心の痛み」と指摘したが、あらためてその用例を検討しながら、「心やまし」という言辞によってかたどられる明石の君の内面を見つめてみたい。

池田亀鑑篇『源氏物語大成(索引篇)』(中央公論社)によれば、「心やまし」四四例、「心やましげなり」三例のほか、「心やむ」一例、「なま心やまし」二例を数えることができるが、とくに女性が抱く「心や

まし」という心性をみていくと、そこには、いかんともしがたい隔てを前にした心のうずぎのようなものを感じることができよう。たとえば、葵祭の折に若紫と同乗して見物にむかう光源氏の車について「人とあひ乗りて簾をだに上げたまはぬを、心やましう思ふ人多かり」(「葵」②三〇頁)と表現されているように、「簾」によって疎外された源氏を慕う女性たちは「心やまし」と思い、六条院における正月の臨時客をめぐることは「物隔てて聞きたまふ御方々は、蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくやと心やましげなり」(「初音」③一五二頁)というように「物隔て」てそこに参加できない女性たちは「心やましげ」にたたずむほかはない。だが、これらの女性たちはそこに参入できないことをひたすら恨み妬んでいるのではなからう。「心やまし」き女性たちは、隔てを置かれながら自身がそうした隔てを置かれる立場にあることを充分自覚している。隔てを置かれることによって自身の立場を見つめ、その見つめることによって、それでもあきらめきれぬ思いがくすぶり、心を締めつけるのであつた。

光源氏との逢瀬の後の空蟬は「まことに心やましくて、あながちなる御心ばへを、言ふ方なしと思ひて、泣くさまなどいとあはれなり」(「帚木」①一〇二頁)と表現される。『源氏物語湖月抄』は「まことに心やましくて」の部分について「源の押立たるふるまひを、実にねたく思ふ心也」と注するが、この直前には光源氏の「いとたぐひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ」(同・①一頁)とある。空蟬は光源氏のたぐひなき有り様を知れば知るほど自身との不釣り合いを「わびしく」思っており、だからこそ光源氏を拒み通そうとしたのであつたが、結局それはかなわぬことであつた。空蟬が泣いたのは光源氏の強引さによってばかりではあるまい。空蟬はそのようなふるまひを許したわが身の程がどうしようもなく悲しかったのであり、「心やまし」とはそうした空蟬の心のうずぎをかたどるものである。光源氏への手紙の返事を催促する小君を前にして、空蟬はもう一度「心やまし」という思いを抱く。「心やましく、残りなく

のたまはせ知らせてけると思ふにつらきこと限りなし」(同・一〇七頁)と語られる心情は、直接的には「うち笑みて」「おやすけたること」を言う小君に対するものであるが、空蟬は光源氏に対して「今は見きとなかけそ」とふたりの逢瀬についての口止めを願っていたのであった(同・一〇二頁)。小君が見せる「笑み」に、空蟬は光源氏が小君にふたりのことをこともなげに話している光源氏の口元を重ね合わせているのであろう。自分の願いななど光源氏にとっては取るに足らぬものなのであった。そのように「心やまし」く思う空蟬は、目の前の小君につらくあたらずにはいられないのであった。

しかし、いかんともしがたい隔てとは、なにも身分的格差ばかりではない。新たな恋に走り、かつての恋をかえりみようともしない男を冷たく見つめる妻の心の傷は深い。たとえば、雲居雁。長年「まめ人」としてあつた夕霧が落葉の宮に懸想していることを聞いた雲居雁には「心やまし」が繰り返し表現される。一条邸から帰邸した夕霧が「かかる夜の月に、心やすく夢みる人はあるものか。すこし出でたまへ。あな心憂」などと声を掛けるのに対して雲居雁は「心やましようち思ひて、聞き忍び」(「横笛」④三五八頁)、落葉の宮のもとに通う夕霧のことを聞いて「心やまし」と思う雲居雁はその夜一条御息所からの文を見る夕霧からそれを奪いとり(「夕霧」④四二六〜四二七頁)、夕霧が帰邸した折にも「目も見あはせたまは」ぬ雲居雁は「何心もなう言ひな」す夕霧に対して「心やましよう」思うのであった(同・四七二〜四七三頁)。男性によつて置かれた心の隔てによつて生じるこうした心のうずきは、弘徽殿大后も抱え込んでいた。彼女にとつてみれば、藤壺中宮とは、遅れて入内したものであった。けれども、桐壺院は退位した後、その藤壺とのたつたふたりでの生活を選んだ。「葵」巻の冒頭近くには「まして隙なう、ただ人のやうにて添ひおはしますを、今後は心やましよう思すにや、内裏にのみさぶらひたまへば、立ち並ぶ人なう心やすげなり」(「葵」②一七頁)と語られており、「今后」となつた弘徽殿大后は「ただ人のやうに」暮らす院と藤壺の生活を「心やましよう」

思いながら内裏にとどまるのであった。弘徽殿大后は桐壺院在世中に二度と院とまみえることはない。そして、院の崩御後、弘徽殿大后は桐壺院との隔てが生じた元凶である藤壺たちを徹底的に排斥しようとし、光源氏の召還によつてそれが叶わなかった彼女は「つひにこの人をえ消たずなりなむことと心病み思」す(「濡標」②二七九頁)。ついに藤壺たちを凌駕することができなかつた弘徽殿大后は、「心やまし」き思いを抱えながら物語の表舞台から姿を消していくのであった。

こうした女性たちの「心やまし」という心性は、「敗北感」や「劣等感」といった言辭では説明し尽くせないものである。玉鬘に熱中する鬚黒に対して、物の怪にわづらい正気を失つていく北の方は、鬚黒の慰めにも「いとねたげに心やまし」く思い(「真木柱」③三五九〜三六〇頁)、その後、玉鬘のもとに出かけていく鬚黒に対して火取りの灰をかけることとなる。また、車の所争いの後、「心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし」(「葵」②二三頁)と描かれる六条御息所の傷ついた魂は、葵の上を取り殺していくことになり、出家の願いを光源氏に聞き入れられず「例のことと心やましくて、涙ぐみたまへる」紫の上(「若菜下」④二〇八頁)は、死に至る病を得ていくこととなる。とくに女性たちの抱く「心やまし」という心性とは、その傷口を広げながらじりじりとを身体をも蝕み、やがて女性たちを日常の世界から逸脱させていく可能性をももつ、魂に刻み込まれた傷のうずきとでもいうべきものであった。

住吉にむかう舟のうえで明石の君は、光源氏の乗った車をはるかに見やった。しかし、「心やましくて」その姿を見ることはできなかった。明石の君は確かに光源氏とのいかんともしがたい懸隔を自覚したといえよう。もとより光源氏が明石の君をないがしろにしたわけではないし、そこに他の女性を重んずる光源氏がいたわけでもない。明石の君が自覚した懸隔とは、光源氏との決定的な身分的格差なのであった。野村精一は「政治の中の存在としての自覚が、彼女に「身のほど」と



いう階級的人間観を身をもって発見せしめた」と述べたが、住吉参詣に臨む光源氏は「内大臣」という貴族社会において威勢を誇るものであり、明石の君はその貴族社会のなかにおける取るに足らぬわが身を自覚するのであった。ただ、これほどではなくとも、ふたりの身分的格差はこのふたりが出逢う以前から存在していたものであり、明石の君はそれをあらためて自覚したにすぎないともいえる。しかし、いま、明石の君と光源氏との身分的格差はあまりにもはなはだしく、明石の君にとってはふたりの関係はもはや絶望的なものと認識されたと思われる。はるかに彼方に見える「花紅葉をこき散らしたる」と見ゆる袍衣」に取り囲まれた光源氏の車は、明石の君に対してふたりの関係をあり得ぬものとしてつきつけてくるのであった。

この時、明石の君と光源氏を隔てている物理的な距離は、そのまま貴族社会におけるふたりの格差を示している。そして、明石の君は、いま、光源氏が乗っているであろう車を遠望しながら、それをあらためて自覚する。しかし、ふたりのいかんともしがたい懸隔を自覚しながらも明石の君は光源氏との仲を諦めることができなかつた。どうしようもない恋であることはわかっている。けれども——。諦めきれないからこそ、ふたりの懸隔に明石の君の心はうずく。「恋しき御影」を見ることができないのは、それが「恋しき御影」であつたからに相違ない。「すべて見し人々ひきかへ華やかに、なにごと思ふらむと見え」た供びとたちの様子や「若やかなる上達部、殿上人の我も我もと思ひいどみ、馬、鞍などまで飾りをととのへ磨きたまへる」様子から推せば、はるかに眺望した車の奥深くには、明石の君のことなど毫も気にかけているはずもない「内大臣」としての光源氏が座していることは明らかであつた。この時、もし明石の君の目に光源氏の姿が映じたとすれば、明石の君の魂が身から離れてそれを見たということなのだろう。しかし、光源氏の姿を求めれば求めるほどその「恋しき御影」との懸隔が思われ、「心やまし」き明石の君は、ついにそのうずきを抱えてうずくまる。光源氏にとり憑くかに見えた明石の君の傷つい

た魂はぎりぎりのところで踵を返し、「恋しき御影」への視線は遮断されるのであった。

明石の君はこの場において光源氏の姿を見ることはなかつた。それは明石の君がふたりの懸隔を十分に自覚し、自覚しているからこそ「心やまし」き思いによって目をそむけずにはいられないためであつた。再会譚の話型からみれば、明石の君は光源氏の姿を見ないことによつてかろうじてその場にふみとどまることができたといえようが、明石の君はそこにとどまることによつて、光源氏の正妻腹の子として重んじられている夕霧に比して人数にも入らないわが姫君の境遇を認識していくこととなる。明石の君が自らの意志によつてこれほど強く住吉の神に祈りを捧げたことはこれまではなかつたのではないか。「いよいよ御社の方を拝」む明石の君の姿はそれほどまでに悲痛である。

明石の君は、「内大臣」となつた光源氏がかつてと変わらぬ愛情を姫君に注いでくれることを切に祈る。そこには再会譚において遁世する女の面影を見いだすことはできない。明石の君は、ふたりの懸隔を見つめ、「心やまし」き思いに身を焦がしながらもこの世の中にとどまり続ける。しかし、この世の中にとどまり続けるかぎり「心やまし」き思いが癒されることはないだろう。事実、「野分」巻において、六条院を吹き荒らした野分の見舞いから早々に帰っていく光源氏に対する明石の君は「端の方に突いゐたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、つれなく立ち帰りましたまふ、心やましげなり」（「野分」③二七七頁）と語られる。「心やまし」き思いは、精神や身体を蝕んでいく可能性をも秘めたものであつた。明石の君は、しかし、そうした思いに堪えていくしかない。住吉における光源氏との再会は、明石の君のこれからの過酷な人生史を照らし出しているのであつた。

明石の君の舟は住吉に参詣することもできず、かといって明石に帰ることもかなわない。花紅葉をこき散らしたかのように見える住吉の浜から遠く離れた波のうえ、明石の君の傷ついた魂を乗せたその舟は、

舞い散った一片の木の葉のようによるべなく漂っているのであった。

## 注

- (1) 源氏物語の本文は、小学館刊新編日本古典文学全集に拠り、巻名、巻数、頁数を附す。以下、同じ。
- (2) 玉上琢弥『源氏物語評釈』(三)角川書店、三二七頁。
- (3) 三谷邦明『濶標巻における栄華と罪の意識—八十嶋祭あるいは住吉物語の影響—』『物語文学の方法II』有精堂、一九八九年。
- (4) 石原昭平『蛭子と住吉神』『論纂説話と説話文学』笠間書院、一九七九年、『源氏物語』須磨・明石の神話性—光源氏の運命における禊祓の意味—、『帝京大学文学部紀要』一、一九七九年一〇月、『蛭子の再生—難波の祓と光源氏—』、『王朝物語とその周辺』笠間書院、一九八二年、『禊祓としての地名—難波—』、『堀江—田蓑島—』、『光源氏の再生場か—』、『源氏物語 地名と方法』桜楓社、一九九〇年など。
- (5) 竹田誠子『住吉詣における明石君登場の意義』『中古文学』四九、一九九二年六月。
- (6) 竹田誠子『住吉詣と明石君の遊女性』、『武蔵野女子大学紀要』二九、一九九四年三月。
- (7) 斎藤暁子『濶標巻における明石上』、『源氏物語の研究—光源氏の宿痾—』教育出版センター、一九七九年、一八五頁。
- (8) 篠原昭二『光源氏の栄華と行為』、『源氏物語の論理』東京大学出版会、一九九二年、一六三頁。
- (9) 相原宏美『再会譚』林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房。
- (10) 再会譚の系譜については、乗岡憲正『再会譚の系譜』(『古代伝承文学の研究』桜楓社、一九六七年)を参照。
- (11) 片桐洋一『花橋の』(六〇段)『鑑賞日本古典文学(五) 伊勢物語・大和物語』角川書店、一九七五年、一三六頁。
- (12) 男の歌に対する女の歌の所在について「さて返しはいかがしたりけむ知らず」と語りながら、「車に着たりける衣ぬぎて、つつみに文など書き具してやりける。さてなむかへりける、のちにはいかがなりけむ、知らず」と続けて「あしかららじとてこそ人のわかれけ

めなにか難波の浦もすみ憂き」の歌を載せるこの章段の末尾をめぐって、新編日本古典文学全集頭注は「前に「知らず」といいながら、そのあとのことを述べているのは矛盾で、読者が添加し、原文の末尾を模倣して、「のちにはいかがなりけむ、知らず」といったのであろう」とする(新編全集・三八〇頁)。

- (13) 折口信夫『近江歌及びその小説的な素材』『折口信夫全集』(二五)中央公論社、一九九六年、二〇六〜二〇八頁。
- (14) 高崎正秀『伊勢物語研究の再吟味』『物語文学序説』高崎正秀著作集(五)桜楓社、一九七一年、三六〇〜三六一頁。
- (15) 新編全集『閑屋』②三六五頁、頭注。
- (16) 三谷邦明前掲注(3)論文、二四七〜二四八頁。なお、氏は続けて「しかし、紫式部にとっては光源氏を須磨・明石に流した時から、罪の意識が大きな位置を占めていたはずである。その為に光源氏の栄華を保証しながら、それを蝕む罪の意識が必要であった。ここにこの巻での明石上の位置がある訳であって、読者はこの明石上の悲哀の中に、第二部の構想を見抜くことが出来るのである」と述べて、住吉参詣における光源氏の栄華とそれを内面から否定しようとする「罪の意識」を指摘する。
- (17) 乗岡憲正『鳥游物語に於ける再会譚要素』『古代伝承文学の研究』桜楓社、一九六七年、一一四〜一一七頁。
- (18) 乗岡憲正『呪言とその展開』『古代伝承文学の研究』桜楓社、一九六七年、二三一頁。
- (19) 高崎正秀『源氏物語の成立—未摘花伝承を中心に—』『源氏物語論』高崎正秀著作集(六)、桜楓社、一九七一年、二二六頁。
- (20) 林田孝和『垣間見の文芸—源氏物語を中心にして—』『源氏物語の発想』桜楓社、一九八〇年、二四九〜二五〇頁。
- (21) 三谷邦明『源氏物語の言説分析—語り手の実体化と草子地あるいは濶標巻の明石君の一人称的言説をめぐって—』『国文学研究』一一二、一九九四年三月。
- (22) 『全訳全解古語辞典』(文英堂)は「動詞「こころやむ」に対応する形容詞」としながら、その「語誌」において「自分の思いどおりにならない相手に対する、不快や不満の感情を表す語。そのような

相手は自分よりすぐれていたり身分が高かったりすることが多いので、敗北感や劣等感がにじむ例が多い」と説明する（鈴木日出男執筆）。

(23) 望月郁子「ココロヤマシの重さ—源氏物語語彙小考—」『二松学舎大学人文論叢』五九、一九九七年一〇月。

(24) 源氏物語における「心やまし」等の用例全般については、望月郁子前掲注(23)論文を参照されたい。

(25) 『源氏物語湖月抄(上)増注』講談社学術文庫、一三一頁。

(26) 望月郁子は、先にあげた弘徽殿太后の「心やむ」の用例を「気の狂いそうなたたかい」と説明し、六条御息所の「心やまし」の用例については「ココロヤマシと意識されると、その意識は固まりこそすれ、おいそれとは消えない。当事者の個性との絡み如何では当事者をして復讐に駆り立てる。そういう質の意識である」と述べる（前掲注(23)論文）。

(27) 野村精一「源氏物語文体論の断章—一部の巻々について—」『源氏物語文体論序説』有精堂、一九七〇年、一七四頁。

(28) 新編全集は「身の程を嘆く明石の君は、威勢を誇る源氏一行を、相かかわりえぬ遠景として望見するほかない」と注する（『濔標』②三〇四頁）。

(29) 当該箇所分析については、竹内正彦「野分吹く明石の町—源氏物語における家司をめぐって—」『群馬県立女子大学紀要』二三、二〇〇二年二月）参照。